禁令が下り、その撤廃を求めて唯善が奔走した旨が記されている。さらに『破邪顕正鈔』より具体的に「延暦寺の諸僧、山臥・巫女・陰陽師」等より激しい非難を受けていた状況が窺える。それに加え、存覚四十九歳においては備後において教線が拡大する日蓮宗徒との対論に及んでおり、その影響も見逃すことはできない。さらに当時本願寺(大谷本廟)は、山門の青蓮院を兼帯した妙香院門跡の別院・法楽寺の敷地内に位置し、様々な裁許を青蓮院より受けるなど、青蓮院の影響下に置かれていた。

そのような状況下において、巻き起こったのが日蓮宗徒との対論であるが、存覚は三論宗の教判(等・勝・劣)や天台の教判(開会・分別)を駆使し、開会門においては法華と念仏一法異名ということを強調し、差別門においては機根の別において所依の法の異なることを示されている。『歩船鈔』にも一代の諸教一仏の所説であるが、機根万差によって仏教また万別となり、各々有縁の教によりて出離を求むべきことを示されている。法然が一切の機を平等に撰する法として念仏一行を説いたのに対し、機類の勝劣を認め劣機のためには念仏を説くというのは、やや法然以前に逆行した感が否めないが、このような非常に融和的な所論により巧に対外的論難に対応してゆかれたことが窺える。

以上のように存覚においては、日蓮宗徒との交渉において法華と念仏一体にして、ともに仏智一乘である旨を強調しその論難に応じている。そしてその法華と念仏一体の根柢として用いられている論理が阿弥陀三諦説である。日本においては、阿弥

陀三諦説は平安期の著作『観心略要集』等に見られる。阿弥陀三諦説とは、空仮中の三諦に阿弥陀の三字を配当して、その仏名に寄せて一心三諦の理を円観円修するものである。『観心略要集』では観念念仏を強調しつつも、称名念仏もその名号功德の莫大なるをもって推奨されており、阿弥陀三諦説は称名念仏による往生成仏に理論的根柢を与える思想であり、浄土教の称名念仏を、天台の根本真理で裏付けたものである。

さて具体的存覚の著作の上での阿弥陀三諦説であるが、『決智鈔』には、空仮中三諦||阿弥陀の三字、本迹二門||阿弥陀の功德と示し、法華と念仏一体の理論的根柢とされている。また『六要鈔』では、『顕浄土真実教行証文類』の総序の「円融至徳」を、三諦隔歴に対し三諦円融でもって釈し、「円融至徳嘉号」の所以として阿弥陀の三字に、空仮中の三諦の理が存することをもって論じられている。

存覚『報恩記』における父母に対する報恩思想

谷口 智子

存覚は、『報恩記』において父母に対する報恩を説示している。これに関して先行研究には、存覚が本願寺教団による教権支配を実現するために父母の恩を説示したという見解が存在するが、そこでは当時の存覚の状況や時代背景等が十分に検討されていないと言いが難い。ゆえに本稿では、執筆時の時代背景や『報恩記』と同時期の著作の学術的傾向を考慮した上で、存覚が父母に対する報恩を説示した意図について考察する。

まず、『報恩記』の執筆契機には、存覚が置かれた歴史的状

況が関わっている。当時の存覚は覚如から義絶されており、本願寺以外の真宗教団と深い関係にあった。その中には備後で勢力を伸張していた明光の教団があり、彼らは備後に進出していた日蓮宗の教団と対立したため、存覚に日蓮宗との対論を要請した。これに応答して暦応元年に備後で著された書物の一つが『報恩記』である。以上の経緯で執筆された『報恩記』と同時期の存覚の著作には、聖道仏教や日蓮宗との共通性を論じる聖浄帰一論や、他宗と真宗を対比し各々の優位性を論じる与奪論法が顕著にみられる。例えば、仏教の十宗の大綱を述べた『歩船鈔』では、いずれの宗も得脱という目的は共通するとした上で、凡夫の得益という面で浄土宗を優位とする。また、『法華鈔』『法華問答』では日蓮宗からの浄土教批判に反論し、法華と念仏は共に仏智一乗であるとした上で、凡夫相應の法としての念仏の優位性を論じる。このように、当時の存覚の思想は仏教や日蓮宗の教義を意識して成立している。

以上を踏まえ、『報恩記』における経典や説話の引用に着目し、存覚の父母に対する報恩思想について考察する。まず、『報恩記』では『心地観経』を引用して父母の恩が説かれるが、この経典は天台宗の安然や真言宗の空海も重んじており、日蓮も『四恩鈔』等に引用している。ゆえに、存覚は一般的な仏教教義に準じる形で父母の恩を主張したと思われる、そこには真宗が他宗と仏教としての共通基盤を持つ事を示す目的が存したと考えられる。また、日蓮が儒教による孝養父母を真実の報恩ではないとするのと同様に、存覚も世俗的な孝養ではなく、父母に対して追善等の仏教に基づく報恩を行う事が重要であるとす

る。さらに説話の引用に着目すると、存覚は説話集『十訓抄』に収録がある昆明池の大魚の話を引用している。この説話は動物の報恩譚であり、日蓮の『開目鈔』にも引用される。無論、存覚が日蓮の用いた説話を意図的に引用したとは断定できないが、いずれにせよ『報恩記』には複数の説話が引用されており、存覚が日蓮著作に説話が多数引用される事を意識し、本書において日蓮の論法との共通性を示そうとした可能性はある。そして、以上のように仏教や日蓮宗との共通性を示しながらも、存覚は念仏が父母への報恩において他宗よりも優位性を持つ事を主張している。それは『観経』や善導の著作を引用し、父母に対する追善の場面では念仏が最も利益があると結論付ける事から窺える。

『報恩記』は、存覚が自己の思想を一般論的に論じたものというよりも、仏教や日蓮宗の教義を意識して執筆された書と言える。これは、本書に聖道仏教で重んじられる経典や日蓮が引用した経典・説話が引用される事からみてとれるが、存覚はこのような論法によって真宗と日蓮宗との仏教としての共通性を示し、両者の学理的対立を緩和せんとしたと考えられる。その上で、最終的には念仏の功力を強調し備後における明光教団の拡大を援助したのである。すなわち、父母への報恩として追善の念仏を勧める存覚の主張には、日蓮宗を含む仏教一般と真宗との共通性を示す側面と、日蓮宗に対して真宗の優位性を示す側面があったと考えられる。この意図は、本書と同時期の著作の狙いとも合致し、存覚による父母の恩の説示にはこのような面が存する事に留意すべきである。